

一級河川天竜川水系一雲濟川
(天竜川下流中遠ブロック)
河川整備計画
〔変更原案〕

令和6年9月

静岡県

一級河川天竜川水系一雲済川（天竜川下流中遠ブロック）河川整備計画

目 次

1. 流域及び河川の概要	1
1.1 位置、諸元等.....	1
1.2 人口・主要交通網・土地利用・産業.....	3
1.3 流域の地形・地質.....	6
1.4 流域の気候.....	8
1.5 流域の自然環境.....	9
1.6 流域の歴史・文化.....	12
2. 流域及び河川の現状と課題	14
2.1 治水に関する現状と課題.....	14
2.1.1 主要な洪水の概要.....	14
2.1.2 治水事業の沿革.....	17
2.1.3 洪水による災害の防止または軽減に関する課題.....	18
2.2 河川の利用及び水利用に関する現状と課題.....	20
2.2.1 農業用水、工業用水、上水道.....	20
2.2.2 河川の空間利用及び地域との関わり.....	21
2.3 河川環境に関する現状と課題.....	25
2.3.1 流域の水質.....	25
2.3.2 流域の動植物.....	26
3. 河川整備計画の目標に関する事項	28
3.1 計画対象区間.....	28
3.2 計画対象期間.....	28
3.3 洪水による災害の防止または軽減に関する目標.....	28
3.4 河川の適正な利用及び水利用に関する目標.....	28
3.5 河川環境の整備と保全に関する目標.....	29
4. 河川整備の実施に関する事項	30
4.1 河川工事の目的、種類及び施行の場所並びに該当河川工事の施行により設置される河川管理施設の機能の概要.....	30
4.1.1 河川工事の目的と種類.....	30
4.1.2 河川工事の施行場所.....	30
4.1.3 主要工事の概要.....	31

4.2 河川の維持の目的、種類	35
4.2.1 河川の維持の目的	35
4.2.2 河川の維持の種類	35
4.3 その他河川整備を総合的に行うために必要な事項	36
4.3.1 総合的な被害軽減対策に関する事項	36
4.3.2 流域における取組への支援等に関する事項	40
〈付 図〉	
天竜川下流中遠ブロック図	42

1. 流域及び河川の概要

1.1 位置、諸元等

一雲濟川流域は、静岡県磐田市の北西部に位置しており、その源を赤石山脈（南アルプス）から連なる山地の最南端となる磐田市北部の山地に発し、大楽地の谷を南下して同じく磐田市北部の山地に発し天竜川が形成した扇状地の扇頭部を下る上野部川を合わせ、磐田市の田園地帯を流下して天竜川に流入する幹川流路延長 9.97 km、流域面積 19.68 km² の一級水系天竜川の左支川である。

流域は、西の天竜川と東の磐田原台地に挟まれ、南北約 10.5km、東西最大約 3.3km と東西方向に比べ南北方向が長い形状となっている。



図 1-1 一雲濟川流域 県内位置図

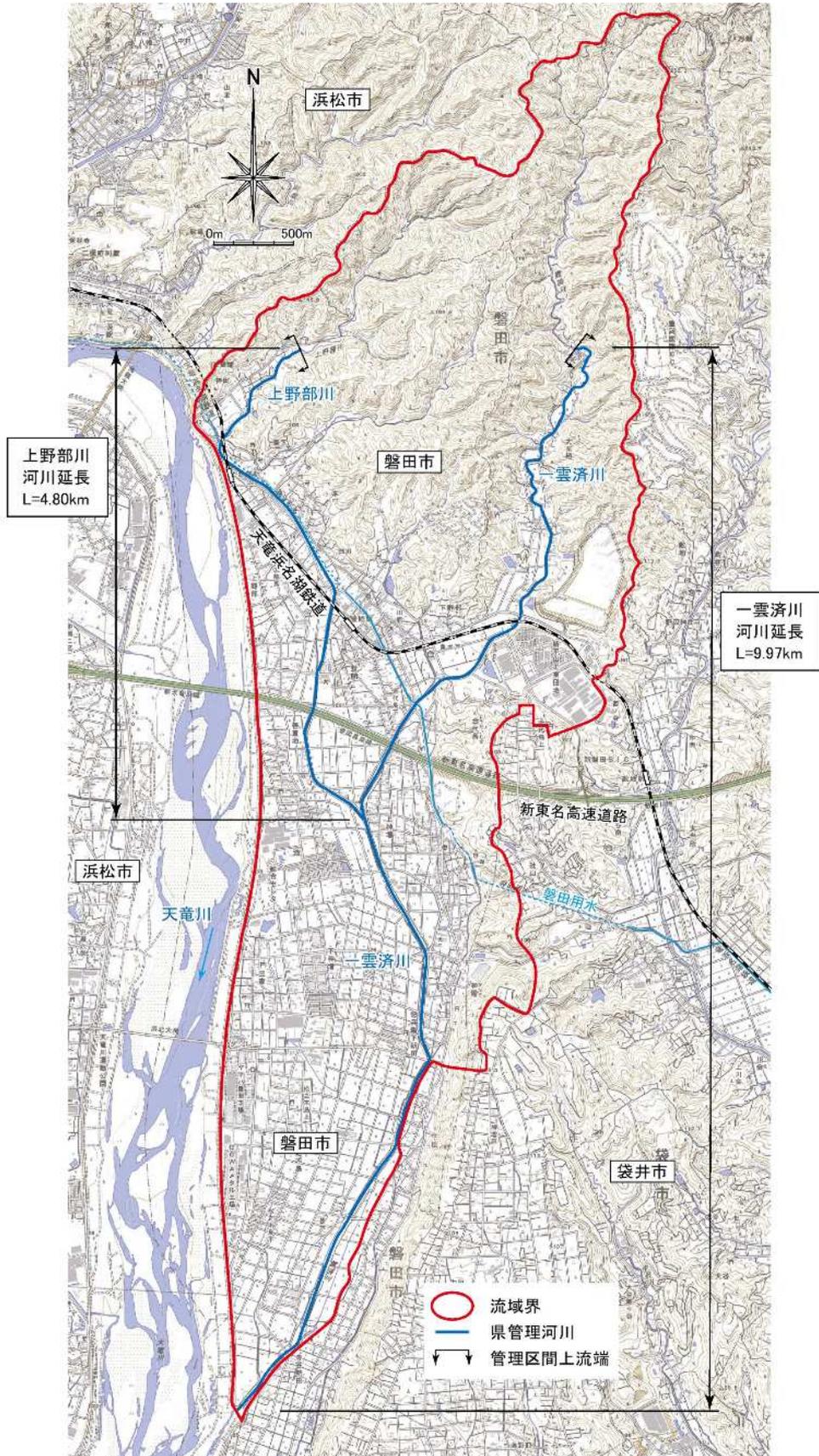


図 1-2 一雲濟川流域図

1.2 人口・主要交通網・土地利用・産業

一雲濟川流域は、すべて静岡県磐田市に所在し、流域内の総人口は約1.1万人（令和4（2022）年磐田市統計資料）である。

流域には、主要地方道掛川天竜線、浜北袋井線等の主要幹線のほか、天竜浜名湖鉄道が横断し、平成24（2012）年4月には新東名高速道路が開通している。

流域の土地利用構成は、令和3（2021）年時点で、山林が約46%、水田・畑地が約29%、宅地や商工業地といった市街地が約24%、その他（荒地等）が約1%となっており、当計画策定当時（平成14年時点）に比べ、水田・畑地の一部で宅地の進行がみられている。また、令和3（2021）年7月に新東名高速道路「新磐田スマートIC」が開通し、その立地特性を活かした周辺交通網とのネットワーク強化により、下野部工業団地が造成されるなど、流域の更なる発展が予想されている。

流域が位置する磐田市の産業は、昭和45（1970）年の浜北大橋の開通や平成2（1990）年の新平山工業団地の完成等に伴い、かつては第2次産業が最も多い割合を示していたが、近年は第3次産業が全体の半数以上を占め、増加傾向にある。

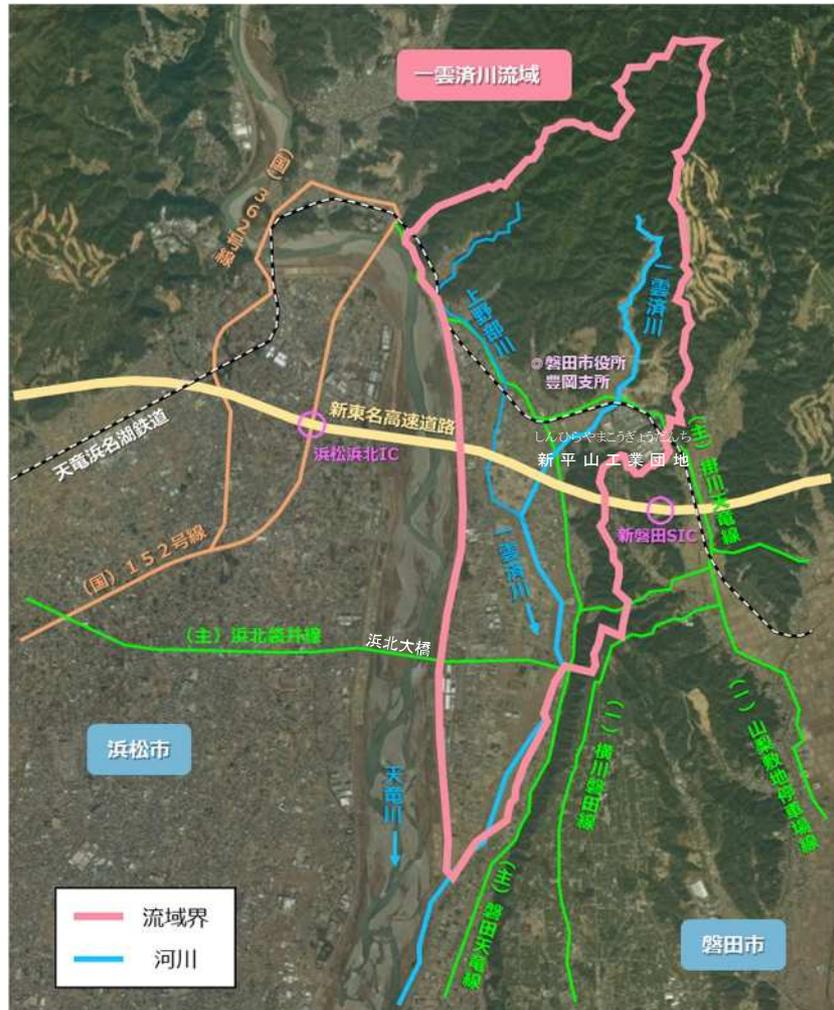


図 1-3 流域の主要な幹線交通網

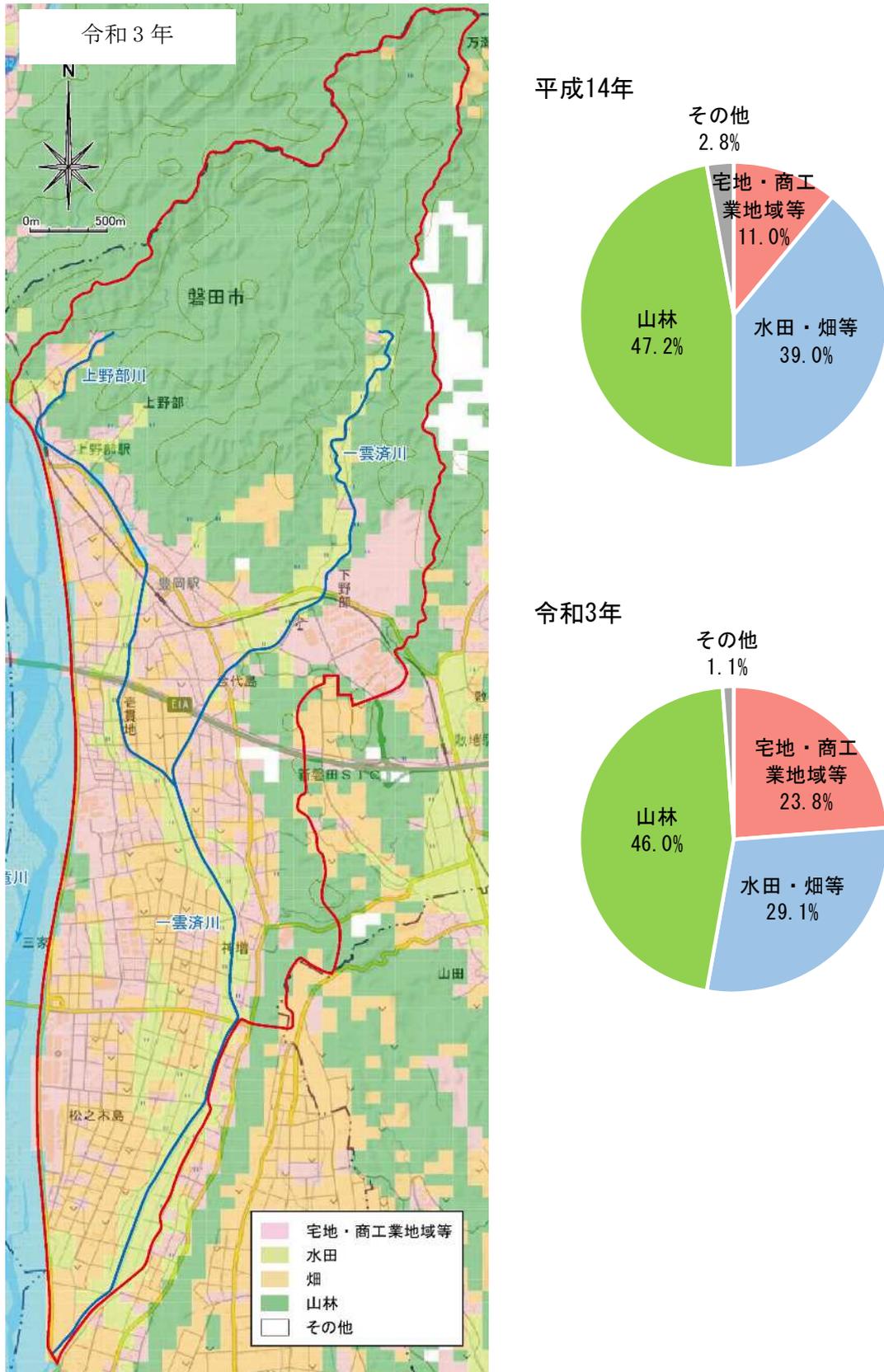


図 1-4 流域の土地利用状況

表 1-1 磐田市の産業別就業者数

磐田市	就業者数（人）		
	第1次産業	第2次産業	第3次産業
昭和50年	10,458	30,804	23,881
平成 2年	7,408	42,585	35,662
平成 7年	5,543	39,853	46,852
平成22年	4,136	35,353	45,129
平成27年	3,359	33,918	45,035
令和 2年	3,127	33,604	45,740

※平成2(1990)年までは旧豊田町、竜洋町、福田町、豊岡村を含む（出典：国勢調査）

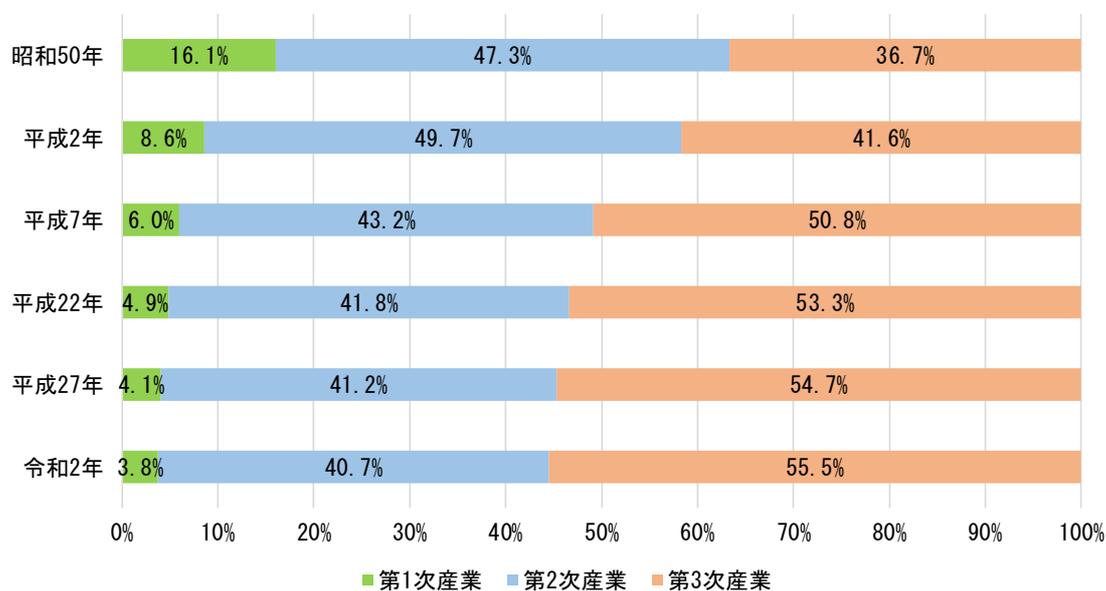


図 1-5 磐田市の産業分類別就業者数の推移（出典：国勢調査）

1.3 流域の地形・地質

一雲濟川流域は、磐田原台地と天竜川が形成した扇状地に囲まれている。北東部の山地は起伏量（山稜と谷底との高度差）100m～200mで赤石山脈の南裾を縁どる山麓地の一部である。

北東部山地から大楽地の谷を南下した一雲濟川は、天竜川が形成した扇状地の扇頭部を南下する。一雲濟川の左岸にせまる磐田原台地は、かつての天竜川が形成していた扇状地が隆起して台地となったものであり、天竜川を挟んだ三方原台地みかたほらに続く広大な台地の一部であった。この台地の中央部付近を天竜川が浸食して流れることで河岸段丘を形成し、上流から運ばれた土砂や礫を堆積させることで現在の砂礫からなる低地が形成された。一雲濟川が流れるこの低地には現在もかつての天竜川の旧河道や旧中洲の微地形が確認できる。

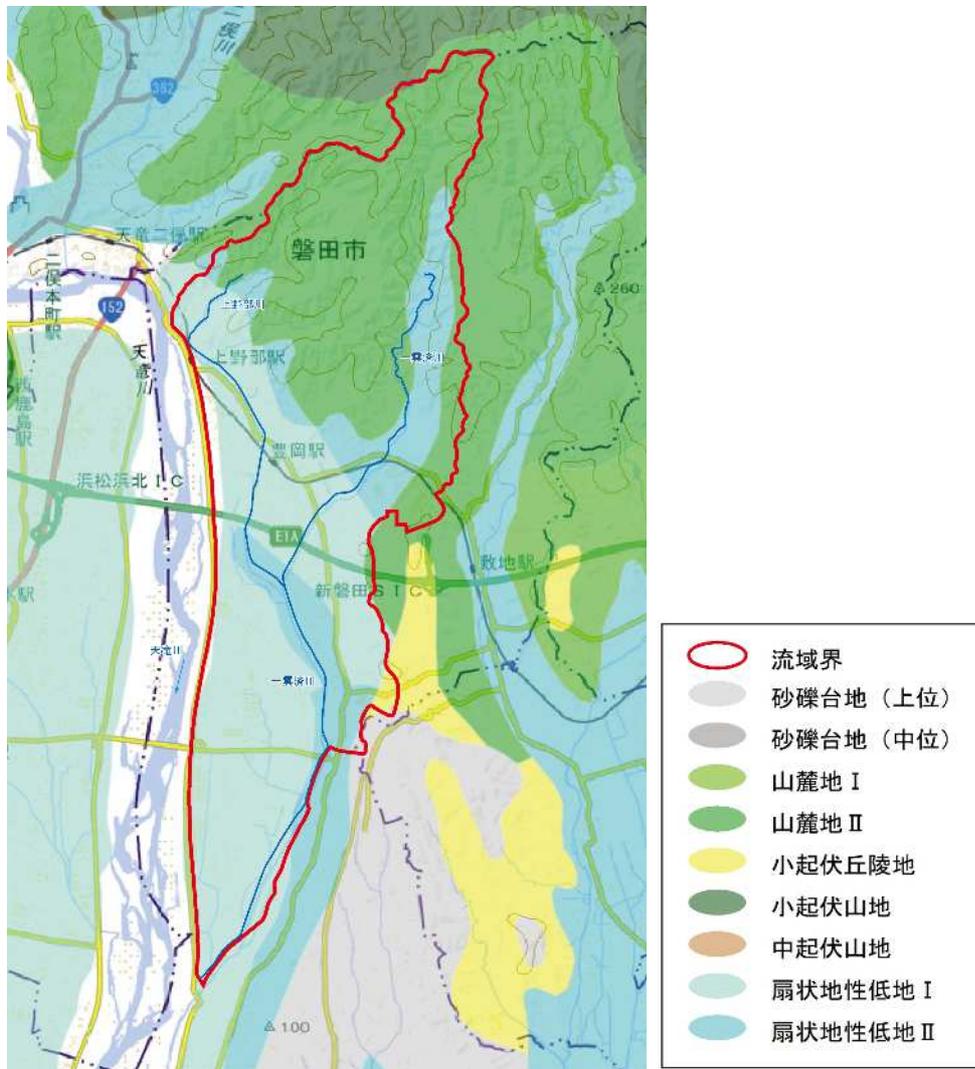


図 1-6 一雲濟川流域の地形分類図

出典：国土数値情報（20 万分の 1 土地分類基本調査）

流域の地質は、北部及び北東部の山地は砂岩、泥岩などの岩石の互層からなっている。古生層にみられる互層は大部分が砂岩と粘板岩で構成され、中生層から古第三紀層にみられる互層は砂岩、頁岩、チャートなどからなっている。また、新第三紀層をつくる互層は、大部分が砂岩、シルト岩から構成されている。平地部では砂礫を主とし、天竜川が運んだ礫や砂、粘土の堆積物により構成されている。

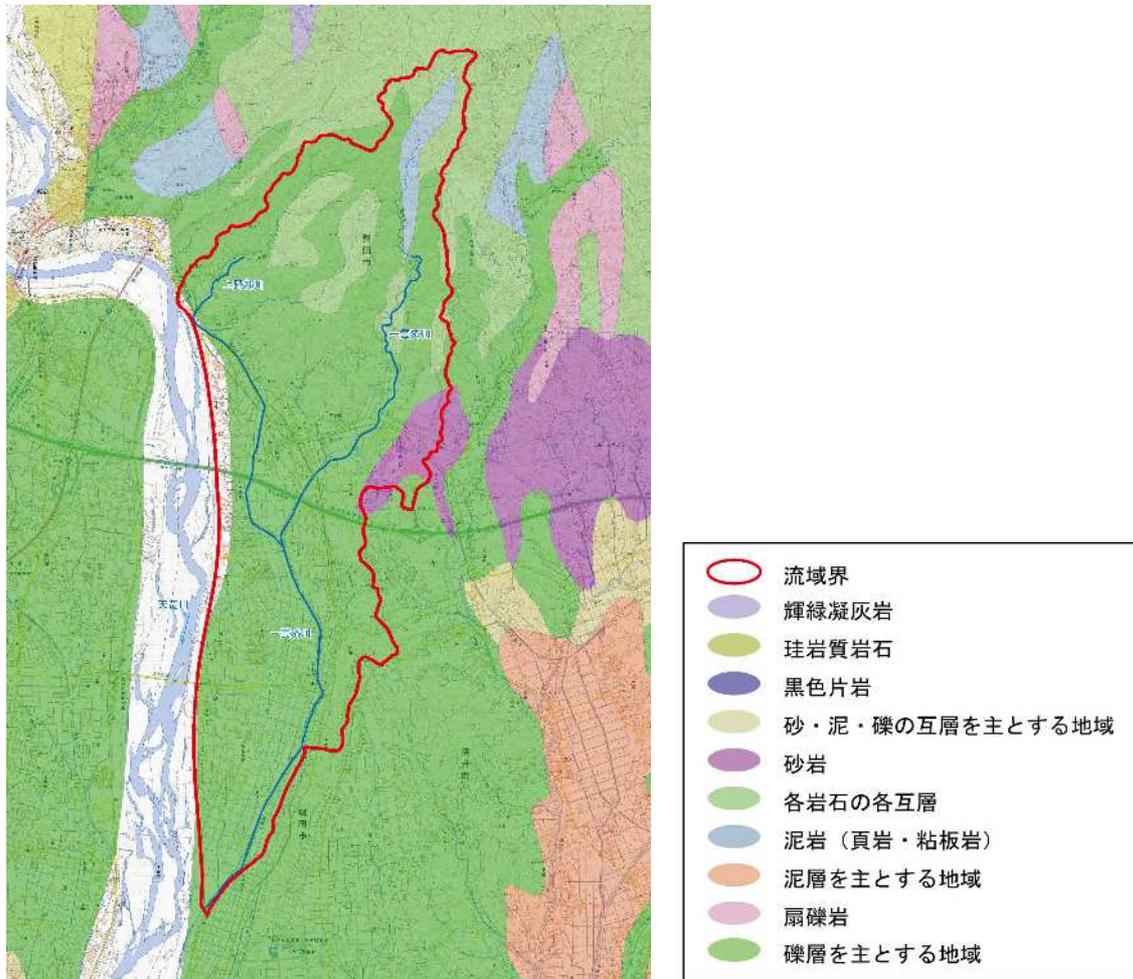


図 1-7 一雲濟川流域の表層地質図

出典：国土数値情報（20 万分の 1 土地分類基本調査）

1.4 流域の気候

一雲濟川流域の気候は、平均気温が 16.8℃（平成 3（1991）年～令和 2（2020）年の 30 年間の平均値：浜松特別気象観測所）と静岡県はままつの平均値 16.5℃とほぼ同じであり、温暖な気候である。

また、年平均降水量は、約 1,840 mm（平成 13（2001）年～令和 2（2020）年の 20 年間の平均値：浜松特別気象観測所）であり、全国平均 1,559 mm（気象庁の 51 地点平均値）に比べ、近年は雨量の多い傾向にある。

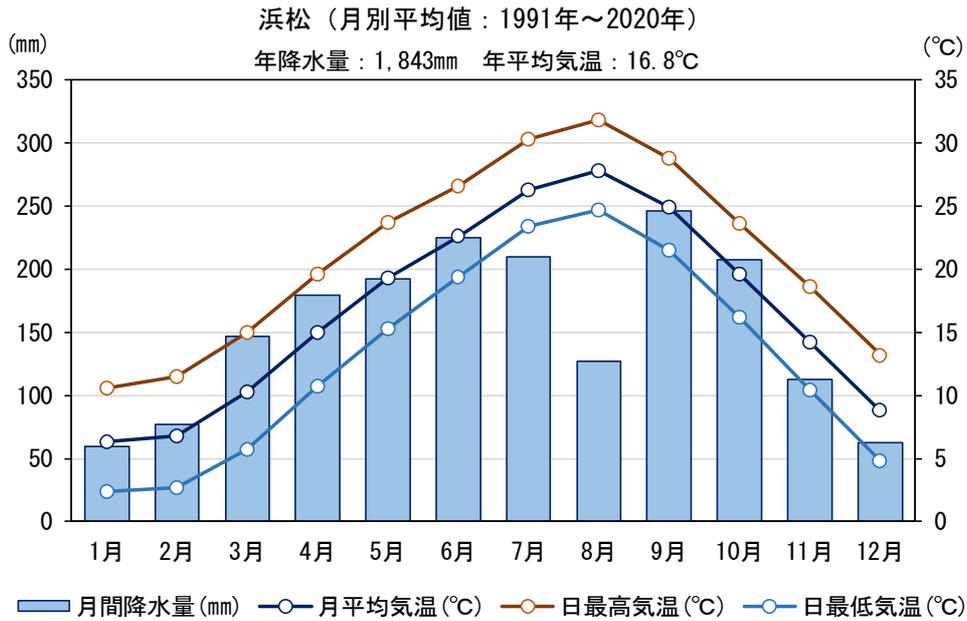


図 1-8 浜松測候所の気温、日照時間及び降水量（気象庁発表平年値）

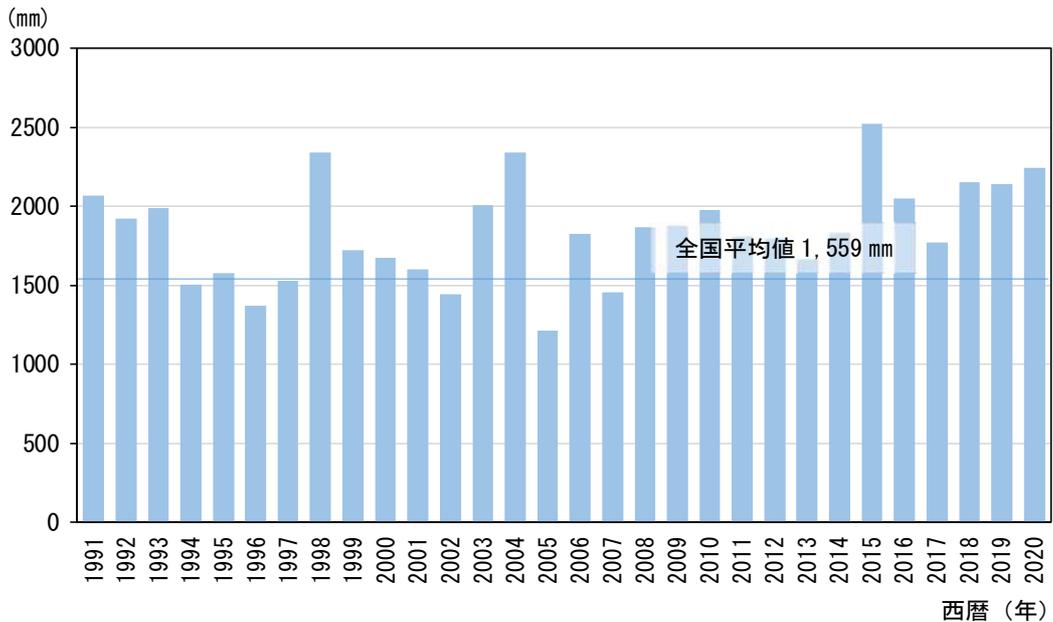


図 1-9 浜松測候所の年間雨量

1.5 流域の自然環境

一雲濟川流域の自然環境は、緑豊かな森林景観の中を蛇行しながら流下する上流域（起点^{たがわさわ}～田川沢合流点）と、田園地帯を直線的に流下する中下流域（田川沢合流点～天竜川合流点）の大きく2つに分類することができる。

これまでに実施された現地調査や文献調査の結果、流域には植物で520種、魚類や鳥類等で245種、計765種の動植物が確認されている。



図 1-10 一雲濟川上流域（起点付近）

図 1-11 一雲濟川中下流域（掛下橋^{かけしたばし}付近）

表 1-2 一雲濟川流域における動植物調査結果一覧

		植物	鳥類	爬虫類	両生類	淡水魚類	昆虫類	陸・淡水産貝類	計	
現地調査確認種	重要種									
	絶滅 (EX)								0	
	絶滅危惧IA類 (CR)							1	1	
	絶滅危惧IB類 (EN)					2			2	
	絶滅危惧II類 (VU)	1	4			1			6	
	準絶滅危惧 (NT)	2	1	1	3	1			8	
	情報不足 (DD)			1					1	
	要注目種	現状不明								0
		分布上注目種等					1			1
		部会注目種								0
	重要種計	3	5	2	3	5	0	1	19	
	典型種計	382	31	2	0	20	0	9	444	
	特定外来生物計	3	0	1	0	0	0	1	5	
	計	388	36	5	3	25	0	11	468	
文献調査	重要種計	24	9	3	4	12	19	3	74	
	典型種計	496	53	2	1	33	92	14	691	
	計	520	62	5	5	45	111	17	765	

※現地調査確認種は、令和3年度実施調査結果による

※文献調査は下記の通り

- 1 平成10年度一級河川一雲濟川 河川調査工事に伴う設計業務委託（河川整備計画調査）[現地踏査：平成11年1月実施]
- 2 自然環境保全基礎調査 生物多様性調査 動物分布調査報告書（環境省自然環境局 生物多様性センター）
- 3 平成11年度 一雲濟川魚類調査報告（坂井隆彦 静岡県淡水魚研究会）
- 4 平成9年度 河川水辺の国勢調査[調査地点：一雲濟橋周辺]
- 5 平成14年度 河川水辺の国勢調査[調査地点：一雲濟橋周辺]
- 6 平成19年度 河川水辺の国勢調査[調査地点：一雲濟橋周辺]
- 7 平成24年度 河川水辺の国勢調査[調査地点：一雲濟橋周辺]
- 8 平成29年度 河川水辺の国勢調査[調査地点：一雲濟橋周辺]
- 9 一雲濟川河川整備計画 植物現地調査[調査地点：平成10年10月実施]
- 10 「植物と石」（昭和34年、豊岡北中学校）[富岡村野辺地区にみられる四季の植物][野部の花に集る蝶類]

令和3(2021)年度に実施した現地調査では、流域全体を通して魚類ではオイカワが最も多く確認され、重要種では上流域においてカワムツ(静岡県RDB 要注目種(N-II))が、中下流域ではトウカイコガタスジシマドジョウ(静岡県RDB 絶滅危惧IB類(EN))やミナミメダカ(静岡県RDB 絶滅危惧II類(VU))、ドジョウ(静岡県RDB 情報不足(DD))、ウツセミカジカ(静岡県RDB 絶滅危惧II類(VU))の計5種が確認されている。

上流域で確認される魚類以外の生物では、起点付近においてアカショウビン(静岡県RDB 絶滅危惧II類(VU))、ツチガエル(静岡県RDB 準絶滅危惧(NT))、カジカガエル(静岡県RDB 準絶滅危惧(NT))が確認されたほか、上野部川との合流点付近においてはニホンイシガメ(静岡県RDB 準絶滅危惧(NT))が、支川となる田川沢においてはマツカサガイ(静岡県RDB 絶滅危惧IA類(CR))が重要種として確認されている。

中下流域は、農業用排水路の一部として整備された歴史から、直線的な河川形状となっているが、水際部にはミゾソバ群落やオギ群落、ツルヨシ群落などが繁茂し、止水や流れの緩やかな場所を好むギンブナやトウカイコガタスジシマドジョウ等の魚類の生育・生息環境に寄与している。また、植物相の重要種では、アズマツメクサ(静岡県RDB 要注目種(N-III))、カワヂシャ(環境省RDB 準絶滅危惧(NT))、アサザ(静岡県RDB 絶滅危惧II類(VU))が確認されている。さらに天竜川合流点付近ではウツセミカジカのほか、ヌマチチブやスミウキグリなどハゼ科の回遊魚が生息し、天竜川本川との連続性が確認できる環境となっている。

表 1-3 一雲済川流域で確認された重要種(令和3(2021)年度 調査結果)

分類	種名	環境省RLカテゴリー	静岡県RLカテゴリー
淡水魚類(5種)	トウカイコガタスジシマドジョウ	絶滅危惧IB類(EN)	絶滅危惧IB類(EN)
	ミナミメダカ	絶滅危惧II類(VU)	絶滅危惧II類(VU)
	ウツセミカジカ	絶滅危惧IB類(EN)	
	ドジョウ	準絶滅危惧(NT)	情報不足(DD)
	カワムツ	-	要注目種(N-II)
鳥類(5種)	アカショウビン	-	
	コシアカツバメ		絶滅危惧II類(VU)
	ハイタカ	準絶滅危惧(NT)	
	ヒクイナ		
	サンコウチョウ	-	準絶滅危惧(NT)
爬虫類(2種)	ニホンイシガメ	準絶滅危惧(NT)	準絶滅危惧(NT)
	ニホンスッポン	情報不足(DD)	情報不足(DD)
両生類(3種)	カジカガエル	-	
	ツチガエル		準絶滅危惧(NT)
	トノサマガエル	準絶滅危惧(NT)	
陸・淡水産貝類(1種)	マツカサガイ	準絶滅危惧(NT)	絶滅危惧IA類(CR)
植物(3種)	アズマツメクサ		要注目種(N-III)
	カワヂシャ	準絶滅危惧(NT)	-
	アサザ		絶滅危惧II類(VU)



図 1-12 一雲濟川流域で確認された動植物
(写真は令和3(2021)年度 調査結果 赤文字：重要種)

1.6 流域の歴史・文化

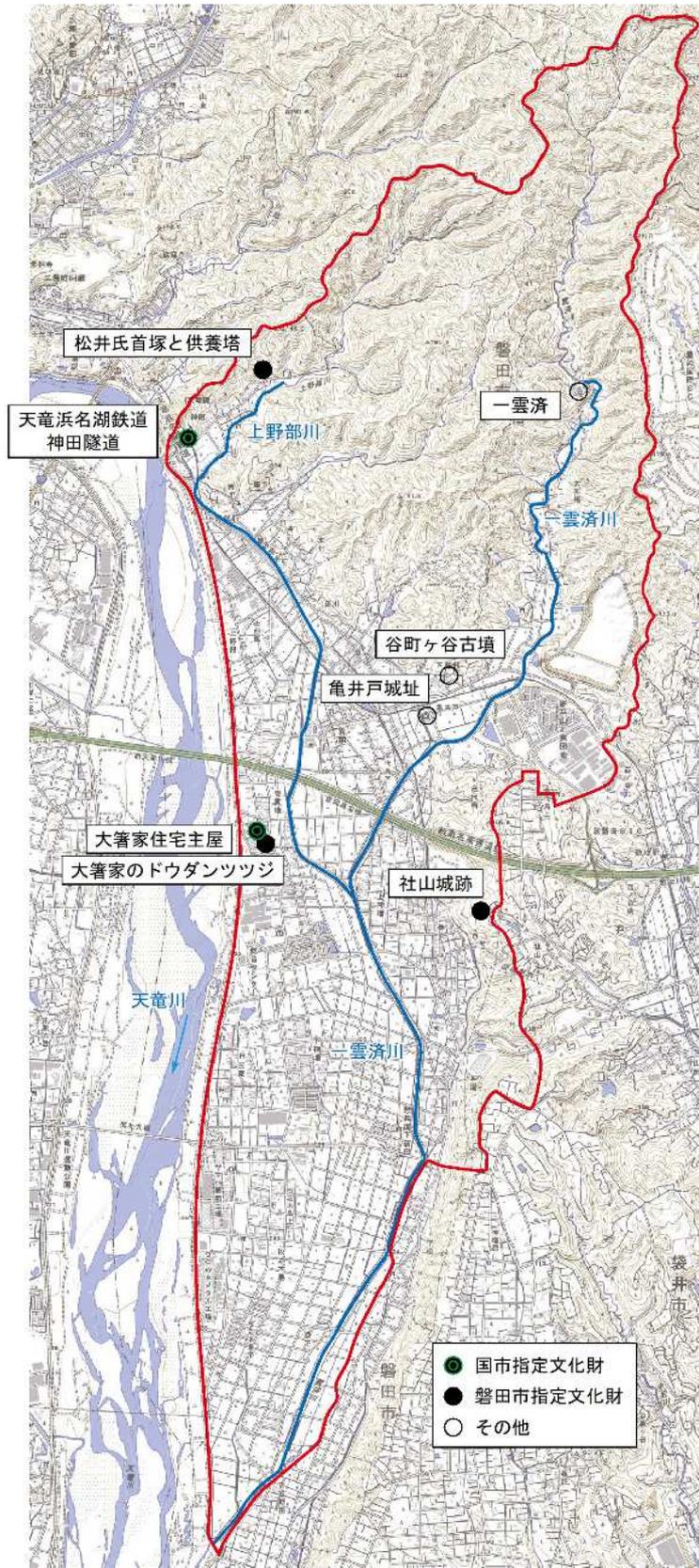
一雲濟川流域は、磐田原台地に沿って多くの文化財・史跡が残され、3件が磐田市の指定文化財に登録されている。

埋蔵文化財は、磐田原台地上とそこに続く尾根において4世紀～7世紀の間に作られた古墳群が存在し、舌状の台地には縄文～中世に至る間の複合住居跡が残され、その証拠となる土器片や石器が発見されている。この他にも、田川沢合流点付近に亀井戸城址（戦国時代）、磐田市役所豊岡支所東側には谷町ヶ谷古墳群などがある。

また、上流部には、一雲濟川の語源とも考えられる古刹、萬世山一雲齋がある。一雲齋は、約560年前に時の高僧・川僧慧濟によって開創されたものである。

表 1-4 一雲濟川流域及び周辺の指定文化財一覧

指定区分	種別	指定名称	指定年月日	所在地	時代
国登録文化財	有形文化財 (建造物)	おおはし 大箸家住宅主屋	平成20年3月7日	壱貫地	江戸時代
	有形文化財 (建造物)	天竜浜名湖鉄道 神田隧道	平成23年1月26日	上野部	昭和前期
市指定文化財	史跡	まつい 松井氏首塚 と供養塔	平成17年11月21日	上野部	室町時代末期
	史跡	やしるやま 社山城跡	平成17年11月21日	社山	室町時代
	天然記念物	おおはし 大箸家の ドウダンツツジ	平成25年4月26日	壱貫地	江戸時代末期



大箬家住宅主屋



神田隧道



松井氏首塚と供養塔



社山城跡

図 1-13 一雲濟川流域の文化財位置図

2. 流域及び河川の現状と課題

2.1 治水に関する現状と課題

2.1.1 主要な洪水の概要

一雲濟川流域は、天竜川の氾濫原に位置しており、過去において天竜川の氾濫による被害を受けてきたが、近年においては、天竜川の河川改修の進捗により天竜川本川からの被害は受けていない。

一方、一雲濟川では流下能力の不足により洪水被害が度々発生しており、中でも大きな被害をもたらしたのは、昭和49(1974)年7月洪水（七夕豪雨）と平成10(1998)年9月洪水（台風第7・8号、秋雨前線）である。

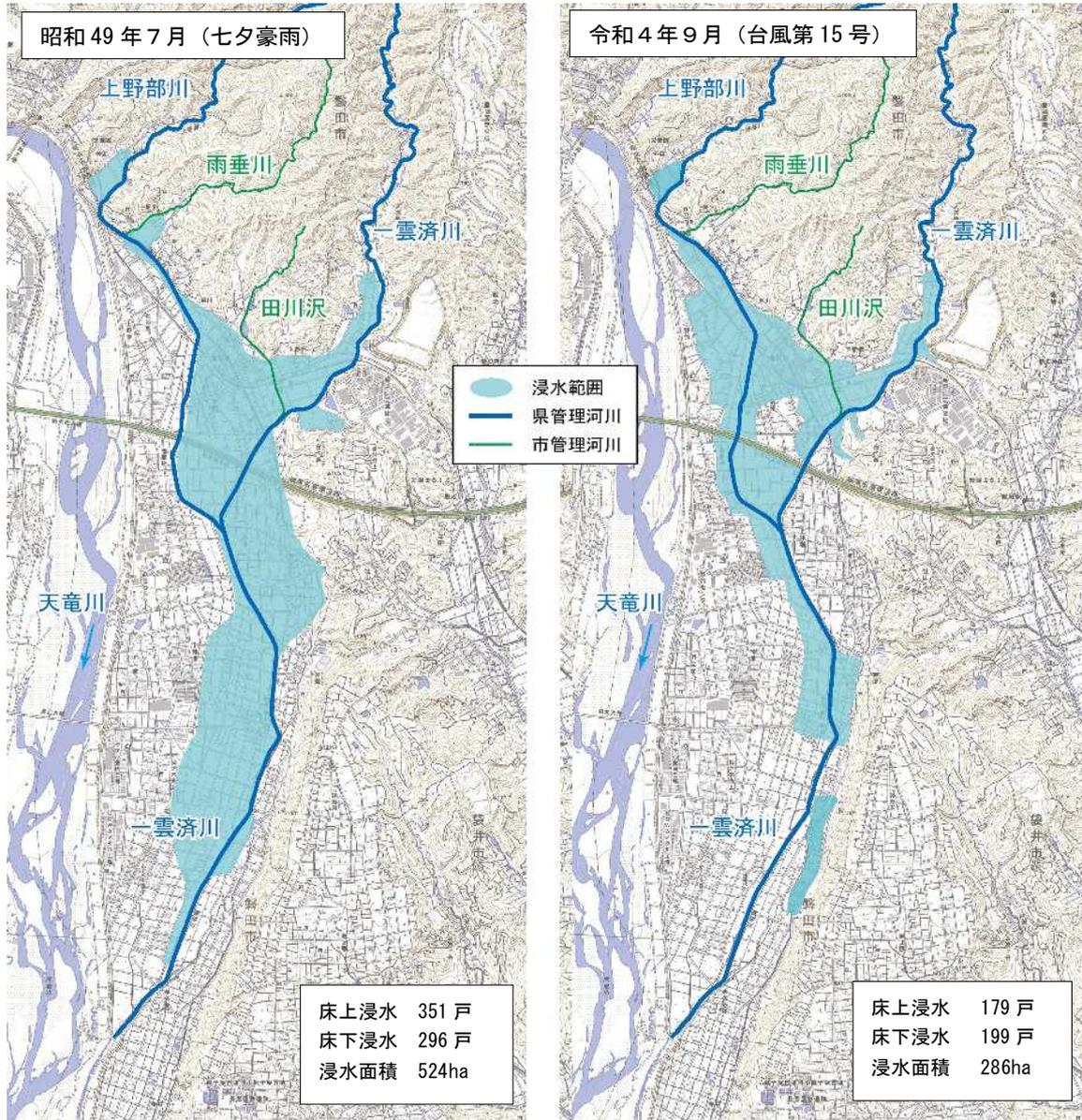
昭和49(1974)年の七夕豪雨は、東海地方の西部にあつて停滞気味の梅雨前線が台風第8号によって刺激され、静岡県下をすさまじい豪雨域に包み込み、静岡市の雨量観測史上空前の日雨量508mm、磐田市消防署豊岡分遣所の総雨量270.5mmを記録した。一雲濟川流域でも溢水・越水により浸水面積524ha、床上浸水351戸、床下浸水296戸という既往最大の被害に見舞われた。

また、平成10(1998)年9月洪水（台風第7・8号、秋雨前線）においては、本州南岸沿いの秋雨前線と台風第7・第8号が北上した影響により、静岡県全域で雷を伴う激しい雨に見舞われ、雨量は福田^{ふくで}266mm、掛川193mm、浜松137mm、豊岡測候所195mmを記録した。豊岡地区においては、土砂崩れによる民家の全壊や溢水氾濫により旧豊岡村役場などの市街地部をはじめとして、浸水面積214ha、床上浸水28戸、床下浸水185戸という甚大な被害に見舞われた。

その後、大きな被害は発生していなかったが、平成26(2014)年10月洪水（台風第18号）により、上野部川沿いで、浸水面積1.4ha、床上浸水8戸、床下浸水21戸となる浸水被害が発生したほか、令和4(2022)年9月洪水（台風第15号）で、浸水面積286ha、床上浸水179戸、床下浸水199戸なる昭和49(1974)年7月洪水（七夕豪雨）に次ぐ大災害となった。

表 2-1 主要洪水の原因と被害状況

洪水名	原因	総雨量 (mm)	床上浸水 (戸)	床下浸水 (戸)	浸水面積 (ha)
昭和49年7月	梅雨前線及び 台風第8号	270.5	351	296	524
平成2年9月	—	61.0	—	12	12
平成3年9月	—	212.5	—	—	8
平成9年11月	台風第7号	134.0	—	—	11
平成10年9月	梅雨前線及び 台風第7・8号	195.0	28	185	214
平成26年10月	台風第18号	273.0	8	21	1.4
令和4年9月	台風第15号	373.0	179	199	286
令和5年6月	台風第2号	369.5	3	9	0.8



※昭和49年7月洪水の浸水面積・浸水家屋数については、旧豊岡村資料より引用

図 2-1 過去の洪水による浸水被害



図 2-2 過去の洪水による浸水被害状況写真

2.1.2 治水事業の沿革

明治以前の天竜川の鹿島^{かしま}地点より下流部は、網状に流れており、一雲濟川流域もその氾濫域内に属していた。天竜川では、明治15(1882)年に第一次改修に着手し、明治32(1899)年までに左岸上流(磐田市豊岡地区～磐田市岩田地区^{いわた})が一つの河道にまとめられた。

一雲濟川は、古くから主に水田からの農業用水の排水路として利用されており、現河道は排水路として整備されたものである。

一雲濟川の治水事業は、昭和39(1964)年に、県道掛川天竜線より下流の区間L=827mで改修が始まり、昭和49(1974)年7月洪水(七夕豪雨)で平地部の大部分が冠水し、甚大な被害に見舞われたことを契機に、県道掛川天竜線から上流L=1,162mで改修が行なわれた。

その後、平成2(1990)年の豪雨により床下浸水等の被害が生じたことから、平成3(1991)年から天竜川合流点付近よりL=6,050m区間で改修に着手し、現在も継続している。

また、上野部川では、平成26(2014)年10月洪水による浸水被害を契機に、平成28(2016)年から令和4(2022)年まで局所的な改修を実施した。

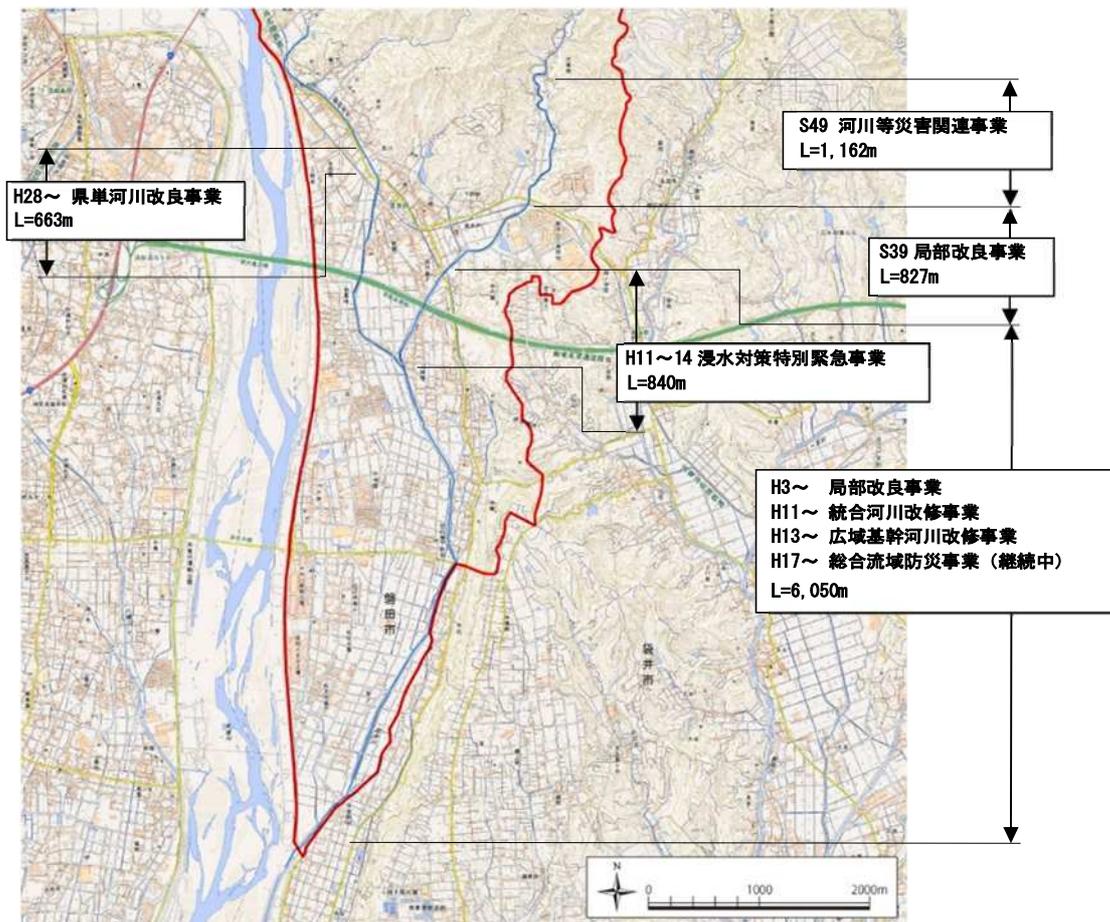


図 2-3 治水事業の沿革

2.1.3 洪水による災害の防止または軽減に関する課題

一雲濟川は、平成14(2002)年8月に策定した当計画に基づき、天竜川合流点付近～準用河川田川沢合流点付近までの6,050m区間を対象に、相対的に流下能力の低い区間から順次暫定的な改修工事を実施している。

現在、計画区間の中流部に位置する惣兵衛橋付近や上流部に位置する永代橋～上野部川合流点付近において未改修区間が残されており家屋浸水被害の早期軽減・解消に向け、引き続き整備を推進する必要がある。

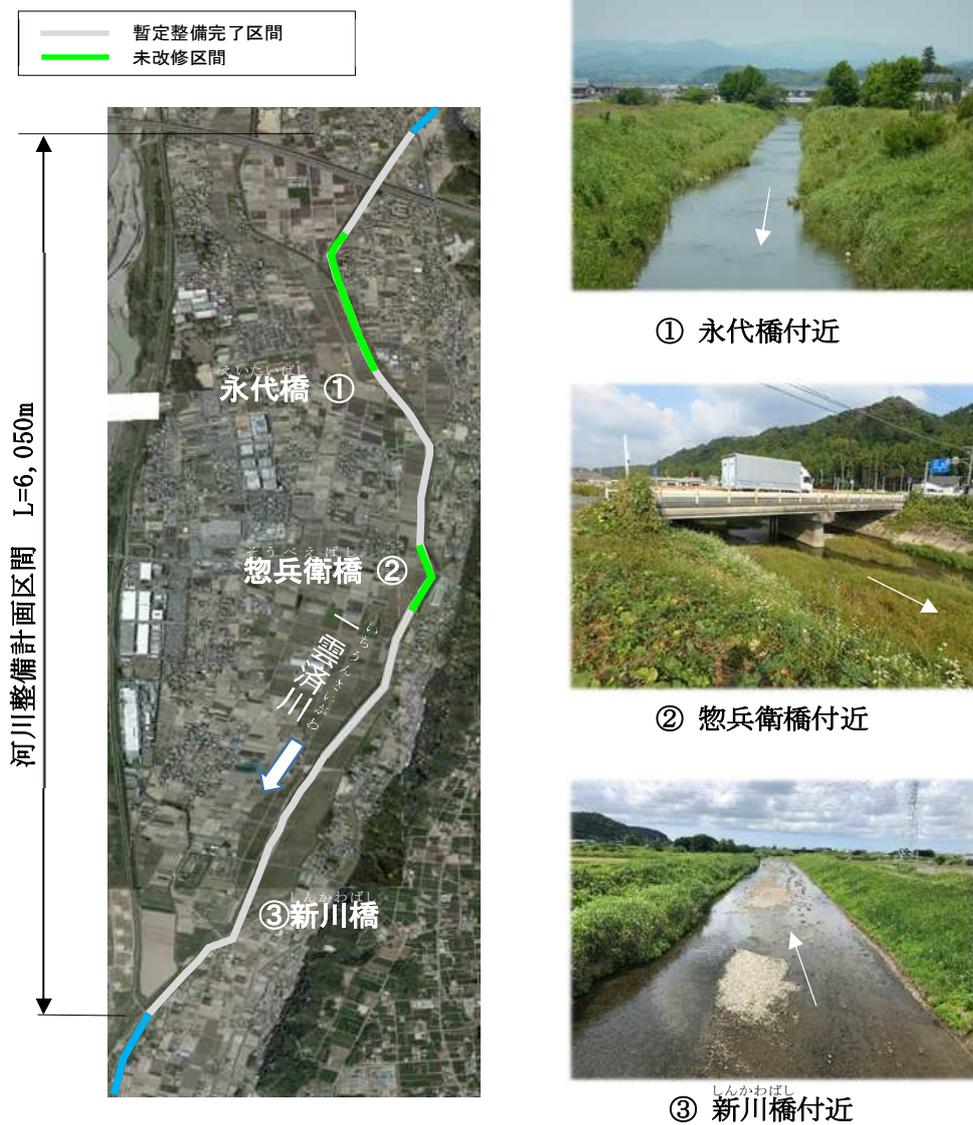


図 2-4 一雲濟川の整備状況

上野部川^{かみのべがわ}では、家屋浸水被害のあった平成 26(2014)年 10 月洪水に対する被害軽減対策として、中流部において護岸工等の暫定的な対策を実施したが、これまで工事实施基本計画や河川整備計画に基づいた河川改修を行っておらず、令和 4(2022)年 9 月洪水による甚大な被害発生を受けた沿川住民からは、早期の治水対策を強く要望されている。

上野部川では、河川に面して家屋が立ち並んでいることなどから、抜本的な治水対策として河道改修を行うことが極めて困難な状況にある。そのため、洪水調節施設による対策を講じる必要がある。

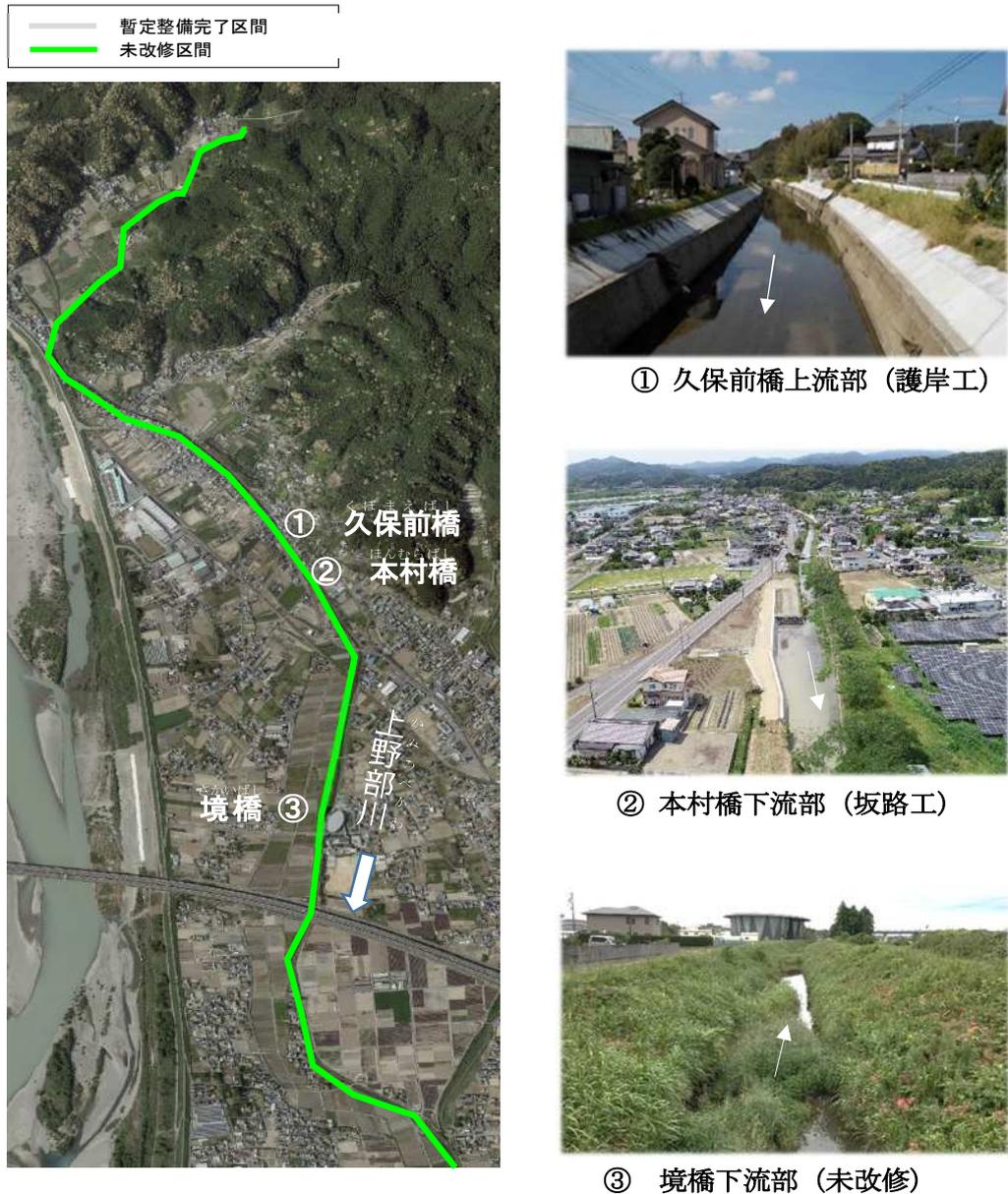


図 2-5 上野部川の整備状況